

Q.1被災地ディアコニアで担われた主な奉仕はなんでしたか？	Q.2印象に残っていることはなんですか？	Q.3ディアコニアを通し、受けた恵みを教えてください。
2回 現地にて子どもたちと遊ぶこと。避難所訪問	子どもたちの生の声、コメントに現状の悲惨さを感じた	教会が訪問、支援、電話、手紙、祈りの奉仕によって教会らしくなった。主に献金を学び行動することを知った
祈禱、献金	長老ご夫妻の奉仕と岩の上教会の連携	ディアコニアについての聖書の理解が深まったこと
現地での奉仕	愛知県芸大学の未信者の学生と充実した奉仕が行えたこと	仮設住宅を一戸ずつ訪問した際、本当に感謝してくれている方がいたり、集会所の集まりでも本当に楽しんでいる顔を見ることができました。神様によって真に隣人とされる瞬間があったと確信しています。
押し花などのイベントの準備 仮設住宅に支援品の配布と困っていることなどの聞き取り	仮設住宅の集会所で愛知県芸大学の学生のスタッフの方々と共に奉仕した事	小さな活動を喜んでくださった事 被災地の方々や多くのスタッフの方々と出会えた事
献金	今もディアコニアが継続されていること	神様が働いてくださっていることを実感できること
被災地へ5回行く事が出来ました。主にエプロンシアター、パネルシアター、紙芝居、朗読をしました。2014年12月に行った時福島の牧師に頼まれクリスマスの紙芝居も読ませて頂きました。	エプロンシアター・若返りの水をした時に若い女性の方から子ども向けに思っていたがとて面白く、楽しませて頂いたと声をかけて頂きとても嬉しかった。	2020年、初め頃からコロナウイルスの蔓延で被災地へ行く事が難しくなりましたが石川夫妻が続けて福島へ行って下さり岩の上教会にキーキの依頼をして下さった事で私共が被災地に心を注ぎ続ける事が出来る恵みを頂いています。
月一回、パウンドケーキ二本を焼く	2018年7月19日～21日の被災地訪問	会員の方の被災地奉仕活動が受洗の一因。
現地訪問(書記)、支援物資仕分け、お手紙奉仕、	初めて現地に伺い、仮設住宅を訪問するとき、私はこのような経験なかったので、ドキドキしながらお尋ねしたのですが、最初のお宅を訪問したとき、名古屋からいらして下さったのですか！と最初に声をかけて頂き、緊張がほぐれて、被災者の方に逆に励まされたことを鮮明に覚えています。素人のおお訪ねし、被災者の方も驚かれたかも知れませんが、受け入れてくださり、神さまが人格的な交わりを導いてくださったこと、そのような奉仕の積み重ねだったのではないかと思います。その方とは今も文通が続いています。	教会で被災地ディアコニアが始まった頃、私は100歳になる祖母と暮らしていました。その祖母はいつも毛糸の靴下を編んでいましたが、被災者の方のお助ましになるメッセージのついた手作りのものを送付する奉仕が始まり、祖母の靴下も用いられ、そのことを通じて、家族や親戚の者に、教会の働きを紹介することができ、協力をえることができました。また被災者の方の中には、ご自分もこの靴下を編んで見たいとおっしゃる方がいて、編み方などもお教えして、思いがけないところで、主が祖母が続けてきた趣味を用いてくださり、祖母の神さまへの信頼にもつながったと感謝しています。
お手紙 2018年から2回の訪問	8年経っても元には戻らない原発の現実と、その中で前を向こうとされている方々の姿	小さな教会を学びによって神様が備え、その時に、用いて下さることを体験できたこと。
被災地訪問(M姉と交替で参加しました) 支援物資の戸別配布、仮設施設の集いの配膳等、大型絵本の読み聞かせ	戸別訪問で、部屋に上げさせていただき話しを伺ったこと。集会所で「ふるさと」等の歌を涙ながらに皆さん歌っておられた事。	人では抱えないディアコニアも皆で協働する事で受ける恵み。海外国内の改革派教会が共に被災地の隣人となる機会となった事。
手編み靴下・お手紙	同年代で、3人の子どものさんがいらつやることが一緒の方に、喜んでお手紙交換させて頂いた。継続できてよかったと思いましたが、実は手紙は苦手だったとお手紙に書かれていました。一方的に出しますが気にしないでと書きました。	仮設住宅に入ってみましたが、何年だったか忘れてしまったが、家を建てて移りましたと電話番号も書いてありました。やっと落ち着かれたんだとわかり安心致しました。
被災地だけにこだわらず弱いもの、苦しいもの、助けを求めもの目に向けて自分でできる範囲の事をしました。	お金もあり立派な家に住んでいるのに子供達に冷たくされている事に心を痛めた。お金でなんだろうとつくづく思った。	親身に話を聞く事により身内より信頼関係を築く事ができた。しかしながら法的には身内ではなく別の他人。本人は信頼しているつもりでも身内からするとという迷惑。ディアコニアの難しさがつくづくみしめた。
地震があつてから初期の現地での奉仕に主に参加しました。	地震直後に現地に赴いた第一回目の奉仕。10年の月日の経過に記憶が薄らいでしまっているところがありますが、写真を見ると思い出します。津波の被害の凄まじさが印象に残っています。また自身も被災されているにも関わらず仮設で親身に動かれる現地の方たちにも心打たれました。	とても悲しい出来事ではありますが、何もできずにいるキリスト者である私たちに、隣人に仕える機会を与えてくださった神さまに感謝致します。
仮設住宅の集会所でのイベント参加、健康相談	仮設住宅の1軒ずつに水を配ったこと、ご夫妻の働き、長距離の運転	ご夫妻の働きを知ったこと、その働きに参加出来たこと
被災地で聞き取り。物資配布。子達と交流。カフェ手伝い。お菓子作り	2012年8月宮城に初めてS長老とK執事と3人で行った時のこと。	現地での様々な出会い、出来事を通して本当に自分ができることは限られ、苦む方の助けになることも困難だと実感しましたが、そこにも確実に私達の思いを越えた神様の働きがあることを知りました。まだまだ厳しい状況ですので、引き続き東北のために福島のために祈ります。信仰者の祈りとそこから示される御心を知らされた時は、先がみえなくても神様の器とされ主の大きな救いのご計画に用いられることを知りました。
現地の子供たちとたくさん遊びに、7年経った被災地の現状を視察しました。	中浜小学校の津波被害の跡、福島原発周辺の環境	神の恵みに生かされた私達が、日々祈ることが与えられたこと。そしてなにより、現地を訪れる機会が与えられたこと。
現地での奉仕が抱えず、報告を注意して聞き可能な限り献金をお捧げしました。2019年10月に牧師とともに被災地を訪れ、カフェドクンマの働きをお手伝いする機会を与えられましたが、被災地にはまだまだ爪痕が残っていたのが印象に残りました。	①芸大生とコラボされて、奉仕された事。②放射能リスクのため、外で遊ぶ機会を奪われた被災地の子どもたちと一緒に思いっきり遊ぶ奉仕のこと。③仮設住宅を一軒一軒回り、言葉をかけ要望を聞き、またそれに応えていたこと④お手紙奉仕	神の教会は、弱くされた人を見捨てないということが分かった事。そして、そのような働きを担われた岩の上教会で礼拝を捧げられる喜び、感謝を受けた。(ディアコニアの働きを為さい教会で礼拝していたら、そこから力を受ける事ができるだろうか)
お祈り 献金	自分としては現地へ行くなどの余裕がなかった	悔い改め
福島に限らず各地で地震や天候による災害が各地で起こっています。飲酒による子供の事故。あまりにも痛まし涙が出てきます。毎日自分が何が出来るのか自分自答しています。お祈りするしかないですね。	福島の事故は人災ですが地震、天候については人間はなす術がないと本当に弱い物だと実感しました。去勢を張らず生きていく事が難しいことが常に思っています。	小さな私の祈りによって変わるものがあったなら幸いだと思えます。
お祈り・献金をしました	3.11のときに岩の上教会が動いて、被災地ディアコニアが始まった事。また、それがあって今の地域ディアコニアがあること。	一方的な支援だけでなく、地域の人を中心に共同すること。
物資の送付、被災者の方との電話のやりとり	被災者の、Sさんと電話のやりとりを通して、良きおまじわりが与えられた。手紙のやりとりは待たなく、電話だったので、その分臨場感があり、対応が速やかだったようにお話を聞いて思いました。	Sさんからお話を聴いて、被災者の方の声を、ご自身のお稽古の会の方などに届けたところ、すぐに、物資が集まりお届けすることができた。連携プレーができたことが嬉しかったというところで、このようなお交りは、2～3年続いたが、今はもう、
		このアンケートの話を伺い10年前のことをまた覚えました。キリスト者以外の誰もが東北を思い、祈り、何かできることはと募金なども盛んであったと思います。その中で私自身は特に何も出さず祈禱会で祈りを合わせていたと思います。現地にご奉仕に行かれた兄弟姉妹方は道無き道を本当に大変なご奉仕で、話を伺いながら焦燥感を感じていました。その中で物品を送る機会がありました。私は三人の小さなお母さんの要望で服を選び送りました。ずいぶん小さいお子さん方でどれほど心細い思いをされていたことと思います。手紙と共に送りました。結局やりとりはそこで途絶えてしまいましたがあれから10年たちきつとそれぞれがたくましく成長されたことを願って止みません。しかしながらこのアンケートの機会を頂かなければ私はこのことを忘れており、なんて薄情なのかと呆れます。隣人となることができます。つい眠ってしまった弟子そのものでした。継続してディアコニアを続けて下さることで教会として祈りまた覚えることができました。今後、隣人についてより一層見たいと思います。
現地での活動、物資送付など	活動当初の仮設住宅で生活をされた方々のご様子。福島の立ち入り禁止区域付近に行ったこと。教会員、教会員以外の方々が力を貸して下さったこと。	被災地での活動を終えるといつも、胸が痛み辛い思いをしていましたが、イエス様により頼むこと、イエス様が誰よりも隣んでおられることを教えられました。遠い名古屋からできることは本当に僅かではあるものの、必要な奉仕者がいつも与えられ、毎回私の心配や想像を超えて神様が奉仕者を用いてくださり、被災地の方々のために仕えることができました。また、のぞみセンターやサマリタンハウスの働きと、岩の上教会の働きを考えると、全て神様の御計画だったことを思われます。